

大東文化大学 博士学位論文審査報告書

氏 名 バス アンピカ

学 位 博士（日本文学）

学位記番号 甲第130号

学位授与年月日 平成28年3月22日

審査研究科 文学研究科

論文題目 近松演劇研究

論文審査委員 (主査) 大東文化大学教授 池山 晃
(副査) 大東文化大学教授 播本 眞一
(副査) 大東文化大学教授 藤尾 建剛
(副査) 大東文化大学中国学科教授 門脇 廣文

この部分に掲載されている内容については、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨に関する箇所では無い為、加工がされておりますので、ご了承願います。

1. 論文の要旨およびその特色

本論文は、主に近松作品の文章技巧について論じたもので、具体的には、「もの」に「情をこむる」という表現手法の研究に集約される。

本論文の構成は下記の通りである。

目次

序論

第一章 近松の「もの」を巡る作劇法

第一節「近松演劇論」と近松の作劇法

第二節「情を込める」を巡る研究

- ①初めに
- ②「興象」を巡る研究
- ③「情」・「景」を巡る研究
- ④「心」・「姿」を巡る研究
- ⑤近松演劇論における「情」を巡る研究

第三節 近松演劇論における演技表現

- ①「芸の慰み」を巡る研究
- ②近松演劇論における「趣向」を巡る研究
- ③近松演劇論と「虚実皮膜論」

第四節 まとめ

第二章 近松作品における「情を込め」て観客に「芸の慰み」を与える

- ①『曾根崎心中』試論—「笠」を巡る研究
- ②『曾根崎心中』試論—「煙草」・「行灯」の作意—
- ③『心中二枚絵草紙』試論—「杖」を巡る演出作意—
- ④『卯月紅葉』試論—「水晶」・「緋縮緬」の演出作意—
- ⑤『冥途飛脚』試論—「鳥」の趣向—
- ⑥『女殺油地獄』における節句—「粽」・「幟」・「菖蒲」—
- ⑦『心中天の網島』試論—「炬燵」・「箆笥」・「風呂敷」—
- ⑧『心中宵庚申』における「毛氈」と「鉦」

第三章 結論

引用・参考文献

序論では、本論考の課題が設定され、研究方法について述べられている。まず、著者の研究の原点であるインド演劇論、ラサ論から説き起こされているが、それは「もの」に心情を託して人物の心境やその性格を描写し、そうすることによって観客に感銘を与えるというものである。著者は、近松門左衛門の浄瑠璃にも、このラサ論と同様の考え方があるとして、まず、近松の演劇理論にそれを見出し、その内実を確認し、次に、実際の作品の中にその理論がどのように活かされているのかを探求するとしている。

第一章では、第二章で実際の作品の検討に入る前に、先行研究にもとづき、「もの」に「情をこむる」という近松の演劇論を表す基本的な概念について整理している。第二章を実作研究篇というとすれば、この章は理論研究篇ということができる。

この章は、「近松演劇論」と近松の作劇法、「情を込める」を巡る研究、「近松演劇論における演技表現」という三つの節からなる。

第一節「近松演劇論」と近松の作劇法においては、近松の作劇法について、近松自身が述べた貴重な演劇理論（没後の『難波土産』元文三1738年所収）に記される「興象」という言葉を手がかりに、坪内逍遙、森修、原道生、黒石陽子、東晴美、中村幸彦、白方勝などの先行研究を踏まえ整理している。

早くに坪内逍遙が近松の演劇論に注目したこと、森修が「芸能論の展開と近松」（『近松と浄瑠璃』）において、「実」らしき「虚」をとりいれることによって「虚実皮膜論」が、その当時において時代的に新しい芸術論であったと指摘したことなど、これまでの近松の演劇論に関する言説について説明している。

その後、先行研究の中で最も重要なのは中村幸彦氏の論考であるとして、多くの紙面を割き、中村氏の論考にもとづいて分析を加えている。なかでも、中村氏が指摘した漢詩文の概念である「興象」という概念、すなわち「詩境の中における対象に触発された情的なもの」について、著者なりの分析を加え、「もの」に「情をこむる」という近松の作劇法を次の四つの方法に整理している。

- ①写実的表現方法
- ②現実超越的表現法
- ③客観的描写方法
- ④文句のせりふなどに感情を盛り込み人物造型する方法

本節は、当該分野の先行研究を渉猟し理解したうえで、著者の研究を、当該分野の研究動向の中に位置づけている点で高く評価することができる。

次に、第二節「情を込める」を巡る研究であるが、近松の演劇論に用いられた「興象」や、「情」と「景」という言葉の概念について、『難波土産』『蔭涼軒日録』『白石先生手簡』『日本風景論』『日本史詩』『東洋陳人峽宦詩稿』『唐詩訓解』などから多くの用例を拾い、また「心」と「姿」という言葉の概念について『俊頼髓脳』『無名抄』『新撰髓脳』などから用例を採取し、検討を加えている。最後に、近松の用いる「情」という言葉の概念について『役者論語』『伝奇作書』『南水漫遊拾遺』などの例を引きながら、検討を加えている。

第三節「近松演劇論における演技表現」では、「芸の慰み」（芸が観客に与える慰め）、「趣

向」（どのようなアイデアを提供するか）、「虚」と「実」の概念（「虚実皮膜論」（演劇は虚と実の微妙な間にあるとするもの））について、久松潜一、中村幸彦、森修、原道生などの論考を参考にして、『日本書紀』『万葉集』、あるいは『古今和歌集』の仮名序、『国歌八論』『閑吟集』『風姿花伝』『貞享四年義太夫段物集』『役者論語』『難波土産』などから、それらに関する箇所を引用して、その内容を確認している。

第二章は、上記世話浄瑠璃七作品を対象として、「もの」に「情をこむる」という近松の作劇法を具体的に検討するものである。近松の文章技巧に関する論考は一定数存在するものの、未解明の問題は多く残されている。バス氏は、「もの」に、どのような「情」がどのように「こ」められているのかという問題の解明にとりくみ、論拠となる用例を数多く集め、丁寧に議論を積み重ね、新見を提示している。

すべてを詳細に論評することは紙幅の都合があつて難しいので、研究誌『日本文学研究』に掲載された二編について述べ、他は概略を記すこととしたい。

『日本文学研究』第54号に掲載された、「『女殺油地獄』考—節句と「粽」・「幟」・「菖蒲」の作劇法—」における、「幟」と「菖蒲」に関する議論は、首肯すべき新見を提示したものといえる。『女殺油地獄』は、近松門左衛門晩年の作、享保六年（1721）竹本座初演。大阪の油屋・河内屋の放蕩息子である与兵衛が借金の返済に困り、近所で同じ商売をする豊島屋の女房お吉に金策を頼んで断られ、お吉を惨殺する、という世話物である。

まず、「幟」に関するバス氏の議論をとりあげる。バス氏は、与兵衛がお吉を殺す「豊島屋の場」の、開幕と閉幕に「幟」が描かれていること、描かれ方が前後で相違することに注目し、「幟」の描写が場面の変化と連動するように描き分けられ、「幟」という「もの」によって、場面の状況、登場人物の心理が表現されている、と論じている。

開幕と閉幕の関連箇所は以下の通り。

暮きなれし。年もひさしの。蓬、菖蒲は家ごとに。幟の音のざわめくは、男子持ちの印かや。

（開幕）

右手より左手の太腹へ。刺いては抉り、抜いては切る。お吉を迎ひの冥途の夜風。はためく門の幟音、あふちに売場の火も消えて。庭も心も暗闇に、うち撒く油、流るゝ血。踏みのめらかし、踏み滑り。身うちは血潮の赤面赤鬼……（閉幕）

「豊島屋の場」開幕、引用本文に連続して、豊島屋家中におけるお吉や娘たちの姿が描かれるから、豊島屋の外でざわざわと鳴り響く「幟」の音は豊島屋と関連するものとして捉える必要があり、豊島屋の幼い子供とお吉の身に近づく不幸を暗示している、とバス氏は述べる。また、こ

の「ざわめく」つまり「どことなくさわぎ動く感じになること」は、金の返済に切羽詰まった与兵衛がお吉を殺す予告ともなっている、とバス氏は指摘する。近松は「幟」という「もの」、その音を用いて場面に宿る不安、事件の予兆を示しているとするのである。

一方の閉幕は、与兵衛がお吉を殺す場面。与兵衛は、油まみれになりながら、脇差で、お吉を衝動的にさし続ける。この劇的な場面と連動するかのよう、外の「幟」も「はためく」、ばたばたと激しく動き、鳴り響く。この「幟」の音は、豊島屋に迫る危機が大きなものとなっていること、与兵衛がのっぴきならないところまで追い詰められていること、子供を心配しながら殺されるお吉の心の動きの大きさを表現している、とバス氏は指摘する。開幕の「ざわめく」「幟の音」が、閉幕では「はためく」音に変わる、外でざわざわと吹いていた風が荒々しくなる、という事象の変化は、与兵衛やお吉の心理の変化を示すように仕込まれている、とバス氏は述べる。首肯すべき見解である。

次に、「菖蒲」に関する論を紹介する。関連する本文は以下の通り。

葺きなれし。年もひさしの。蓬、菖蒲は家ごとに。幟の音のざわめくは、男子持ちの印かや
(開幕)

軒の菖蒲のさしもげに。千々の病は避くれども。過去の業病逃れえぬ。菖蒲刀に置く露の、
たまも乱れて、息絶えたり (閉幕)

開幕、閉幕ともに「菖蒲」という言葉が置かれ、閉幕には「菖蒲刀」（子供の遊び道具）が描出される。開幕の「菖蒲」は、豊島屋の三人の幼い子供の将来の安全を祈り、邪気を払う気持ちを込めて飾ったものである。しかしながら、閉幕では、「軒の菖蒲」によって「千々の病」を避けることはできたが、「過去の業病」から逃れることができずに、「菖蒲」は「菖蒲刀」に変じてお吉を刺し貫き、菖蒲の葉に置く露の玉が消えるように、お吉の魂も乱れて、息が絶えてしまったと記されている。開幕の「菖蒲」が閉幕においては、「菖蒲刀」に変じて、与兵衛が手にしていた脇差を意味する言葉となっている。バス氏は、近松が五月の節句に因む「菖蒲」という「もの」を使って、場面の变化、家族の未来を祈る気持ちが絶望へと変わるお吉の心情を描いている、と説いている。

バス氏が、近松作品を個別に論じるのではなく、その特徴を通時的に分析している点にも、氏の研究姿勢の確かさが読みとれる。バス氏は、端午の節句を時間設定とする正徳五年（1715）五月、大坂・竹本座初演『生玉心中』にも目を向け、同作と『女殺油地獄』との比較を通して、『女殺油地獄』の表現方法の特色を考察している。

『生玉心中』は、大坂伏見坂町の遊女おさがと馴染んで借金に追われていた茶碗屋の嘉平次が、悪友長作に金を奪われ名誉を傷つけられて、生玉神社の境内でおさがと心中を遂げる次第を描いた

作である。

バス氏は、『生玉心中』と『女殺油地獄』における「菖蒲」を比較し、近松の変化を読みとる。以下にバス氏の議論を要約しながら示してみる。

『生玉心中』において「菖蒲」は次のように表現される。

上之巻 社めぐりの道行

客に泣かせて後朝の、別れあやなき菖蒲草、局女郎になぞらへて牡丹畑の名尽しに…。

中之巻 大和橋出見世の場

今日の菖蒲の節句にも、見世さし身皿。とやかくと、人もひ入れや、灰吹きも、碎けて物を思ふらん、繁昌の地の紋日さへ、更けて寂しき五月闇…。

五日にも十日にも、親に顔をいつ見せた……塩町の姉が礼に来て、親子兄弟、菖蒲の杯するとして、今日の節句は嘉平次の顔が見えぬと…。

下之巻 嘉平次おさが道行

今日の祝いの菖蒲の露も、我が袖には憂はしや、つらや、端午の紙幟、かみにも世にも捨てられて、菖蒲刀の切つ先に、かゝる契りの悪縁と、帰らぬ道をたどり行く、涙の雨に星消えて…。

惜しや五日の花菖蒲、花の体を血に染めて、恋の刃にふしみざかの世語り、とこそなりにけり。

上之巻「社めぐりの道行」における「菖蒲」は、遊女を花になぞらえた花づくしの一部として描出され、中之巻「大和橋出見世の場」では、端午の節句の別名として「菖蒲の節句」が記され、節句のお祝いに酒を飲むこととして「菖蒲の杯する」という表現が用いられている。下之巻「嘉平次おさが道行」においては、後に、おさがが嘉平次の「脇差」に貫かれることが「菖蒲刀の切つ先に、かゝる」と表現され、「花菖蒲」に喩えられたおさがが五月五日に亡くなることが「惜しや五日の花菖蒲、花の体を血に染めて、恋の刃にふし」と記される。五月五日に殺人や心中という事件が起こること、脇差が菖蒲刀に擬せられていること、菖蒲だけではなく幟も描出されるところ等々、『生玉心中』と『女殺油地獄』の舞台背景や表現は近似しているといえる。

しかしながら、両作は全く同じ仕組みによっているわけではない。『生玉心中』においては、上之巻冒頭部と下之巻巻末部が呼応するように構成されている点など、近松の工夫は見られるけれども、近松は『生玉心中』で用いた手法をより進化させて『女殺油地獄』を描いたと考える。進化は、前述したように、「幟」を単に「幟」として出すのではなく、「幟」が「ざわめ」いたり「はため」いたりするように、動きを伴う表現に改めているところに認められる。「ざわめく」

という言葉によって、近松は、人々の内面にある不安や事件の予兆を表現し、「ざわめく」を「はためく」に変化させることによって人の心の変化、事件の推移を示し、「幟」が「はため」いている際には人々の心の動きの振幅が最大限に達していること、事件がクライマックスを迎えていることを表現している。バス氏は、近松は自身の先行作品に使用した趣向を、晩年に至ってもなお進化させている、と結論づけている。論拠を確実に示した説得力のある卓論と認められる。

次に、『日本文学研究』第55号掲載「『ひじりめん卯月紅葉』試論―「水晶」・「緋縮緬・帯」の演出作意―」で論じられた「水晶」「緋縮緬」「帯」に関するバス氏の論について述べたい。

『ひじりめん卯月紅葉』は宝永三年（1706）、竹本座初演、古道具屋長兵衛の娘・お亀と夫・与兵衛（養子、長兵衛の甥）が、長兵衛の妾・おまとその弟に陥れられ、梅田堤で心中を図るといふ世話物。結末で、お亀は池に落ちて亡くなるが、与兵衛は生き残る。同作が演じられた次の年、宝永四年四月に『卯月潤色（いろあげ）』が竹本座で上演される。生き残った与兵衛が、僧侶となり、お亀の後追い自殺をするまでを描く作である。この論文で、バス氏は、『卯月紅葉』とその後日譚『卯月潤色』両作に言及し、近松が「水晶」（紅葉）・「火打ち石」（潤色）、「緋縮緬」（紅葉）・「白縮緬」（潤色）の「帯」という「もの」によって、与兵衛の心理、性根の変化を描いていると論じている。

バス氏はまず『卯月紅葉』に描かれた「水晶」（根付）に言及する。蔵に閉じ込められた与兵衛が蔵の中にあつた「水晶」を取り出し、「水晶」に日差しを集め、熾った火を火縄に移し「やすやすとたばこに気を」「休め」という行為に、与兵衛の、子供のような大人になりきっていない性根が表現されている、とバス氏は読みとる。与兵衛が火を熾す描写は、『卯月潤色』にもある。僧侶となった与兵衛が庵室で茶を入れるために「火打ち石」を打つと、亡霊となって姿を現していたお亀が消え去り、その時、与兵衛の後追い自殺の覚悟が定まる。両作を通して眺めると、「水晶」「火打ち石」という「もの」、また、発火という行為によって与兵衛の内面、その変化が描かれている、とバス氏は考察する。

『卯月紅葉』の「緋縮緬」と『卯月潤色』の「白縮緬」に関する議論も重要である。縮緬はいずれも、与兵衛夫婦の伯母から与えられたもの。バス氏は、以下のような指摘を行う。『卯月紅葉』において、伯母は、「肌の物の善し悪しにて常まで思ひ知らるゝ」と、夫婦に「緋縮緬」を与える。遊興にうつつを抜かして商売に身を入れない「気の弱い生れつき」「無分別」な与兵衛に、一人前の人間になってほしいという願いが込められた「もの」である。ところが、この場面で焦点が当たるのは「緋縮緬」を受け取るお亀であり、与兵衛は傍らに点描される人物でしかない。この「緋縮

緬」の帯は、二人が心中するさいにも用いられる。「緋縮緬」の帯は、死にきれず「息絶えず悶ゆる」お亀の「傷の口を隠さんと」与兵衛によって「くるくると、（お亀の首に）二、三遍引き回」される。心中の場面において、「緋縮緬」はお亀の苦しみを救うものではなく、与兵衛の目を現実から遠ざける役割を果たすものとして機能している。一方、『卯月潤色』においては、僧侶になった与兵衛に伯母から届けられた「白縮緬の手巾帯」（法衣の上にしめる）は、与兵衛によってお亀の位牌に結びつけられ、一方の端は与兵衛の左手にしっかりと握られる。本文には、「我（与兵衛）も受け取る、（お亀よ）受け取れと、位牌」に「結び付け、端を左手にしつかと絡み」とある。その直後、与兵衛はお亀の後を追う筋立てとなっている。『卯月紅葉』における「緋縮緬」の帯、『卯月の潤色』における「白縮緬の手巾帯」は、いずれも伯母の愛情の象徴であったが、「くるくると…引き回」す、「しつかと絡み」という表現によって、「気の弱い生れつき」「無分別」な与兵衛が、覚悟を定めた人間に変貌していること、与兵衛の性根の変化を描いていると、バス氏は指摘する。人物の心理や性格を「水晶」「火打ち石」「帯」という「もの」によって描く近松の作劇法を、バス氏は丁寧に解析していると評価できる。

上記の二作の他は概要、主要な点のみを記すこととする。

・『曾根崎心中』（元禄十六 1703 年）

「笠」について。「笠」には、二つの心情が描かれているとバス氏は指摘する。一つは、「笠」の陰に「恋宿る」徳兵衛とお初の心情、もう一つは「破れた笠を拾う」行為によって示される徳兵衛の絶望である。

「煙草」について。お初が煙草を吸う場面に、バス氏は、お初の緊張感あるいは死の覚悟を見てとる。他にも『卯月紅葉』『女殺油地獄』の用例を掲げる

「行灯」について。「吊行灯」の灯を消すことによってお初は天満屋から抜け出すことに成功するが、「吊行灯」という「もの」を用いて、お初の、灯を消すさいの緊張感と灯が消えた後の安堵感を巧みに表現しているとバス氏は述べる。『冥途飛脚』との比較も行い、同作においては、「提灯の消ゆる、命の夕べには」と、死すべき運命が提灯の灯が自ずと消えることによって表現されていると指摘する。

・『心中二枚絵草紙』（宝永三 1706 年）

「杖」について。主人公の市郎右衛門が勘当される場面において、義父の介右衛門が市郎右衛門を「杖」で打ちすえると、その「杖」が二つに折れ、市郎右衛門は折れた「杖」を「親の形見」として拾い上げ家を出て行く。「杖」には親の恩を感じる市郎右衛門の心情が示されると同時に、市郎右衛門と天満屋お島との心中が暗示されるとバス氏は指摘する。ここでも他の十二作品から類

例を引用している。

・『冥途飛脚』（正徳元 1711 年）

「鳥」について。バス氏は、『譬喩尽』『滑稽雑談』等の語彙集、謡曲『善知鳥』、そして近松作品から十作の用例を収集して検討している。そのうえで、近松は「鳥」と主人公忠兵衛の性格を重ね合わせ、主人公が飛びまわる話の展開を表現している、とバス氏は指摘する。

・『心中天の網島』（享保五 1720 年）

「炬燵」について。「炬燵びらき」という習慣に着目し、そこに家族を災害から守ろうとする、おさんの深い願望を見てとる。

「簞笥」について。小春を身請けする金を工面するために、自分の嫁入り道具や子供の衣類を簞笥からとりだす場面では、「簞笥をひらり」と開けるという表現によって、おさんの思い切った心情が巧みに描かれているとバス氏は述べる。

「風呂敷」について。結び解かれる「風呂敷」という「もの」によって、おさんと治兵衛の別離が示されているという指摘がある。

・『心中宵庚申』（享保七 1722 年）

「毛氈」について。近松が「赤毛氈」を紅の蓮華と譬え、半兵衛の「この毛氈を毛氈とな思はれそ」という言葉に、半兵衛夫婦が死後に極楽浄土で、同じ蓮華の上に生まれ変わるという感情を盛り込んでいると指摘する。

「鉦」について。夫婦を別れさせた姑が、お経を唱え「鉦」を鳴らすのは、嫁のお千代との相性が合わないために離縁させるしかなかったという姑の罪滅ぼしを願う気持ちが託されている、とバス氏は述べる。

上記の論考はいずれも、「もの」に、どのような「情」がどのように「こ」められているのかという問題の解明にとりくみ、バス氏独自の見解が示されたものと判断できる。

第三章 結論

「もの」に「情をこむる」手法は、古来『万葉集』の「寄物陳思歌」から見られ、常套表現にすぎないのではないかと考えがちであるが、バス氏は本論文所収の諸論をまとめ、近松は「もの」使いのうまい文章技巧に優れた作家であったと結論している。

2. 論文の審査内容

第一章では、先行研究にもとづき、和漢の諸文献を渉猟し、多くの事例を引きながら「もの」に「情をこむる」という近松の表現手法のもととなった概念について考察が加えられている。「興

象」や「情」「景」などを論じる箇所では『日本史詩』『東洋陳人峽宦詩稿』『唐詩訓解』等、江戸時代の刊行物を丹念に読み込んだ成果が発揮されており、非漢字圏出身者としての努力が見受けられる。一般に著名な「虚実皮膜論」の考察においても、上代の古典『日本書紀』『万葉集』までさかのぼり地道に用例を検討する研究姿勢を見せている。第一章は、多くの用例をもとにして丁寧な分析がなされたものと評価できる。

第二章は各論にわたるが、議論の前提となる江戸時代の様々な「もの」（用具、風俗の類）についての綿密な調査を踏まえ、近松作品全体から採取された豊富な用例にもとづく説得力のある議論が展開されている。近松研究において、文章技巧の研究は必ずしも進んだ分野ではなく、バス氏の論考は実証的に新見を提示したものと評価したい。

3. 論文の評価

上記「論文の要旨およびその特色」「論文の審査内容」で述べた事柄を踏まえ、バス氏の論文を次ぎの諸点から評価する。

1. 課題設定の明確性

明確な問題意識にもとづき、研究の意義や必要性が的確に述べられていると判断できる。

2. 研究方法の妥当性

研究の目的に照らして、適切な研究方法と分析が用いられていると判断できる。

3. 先行研究・資料の取扱いの適切性

当該分野の先行研究を渉猟し理解したうえで、研究を当該分野の研究動向の中に位置づけていると判断できる。

4. 論旨の明確性・一貫性

研究目的、分析、結果、考察の過程においてその論旨は一貫しているが、日本語運用能力に不十分などところがあるため、論理の組み立て方に一部不明確などところが認められる。

5. 構成・表現・表記法の適切性

学術論文として体系的に構成されているが、日本語運用能力に不十分などところがあり、適切な表現・表記法によって記述されていない箇所が認められる。

6. 学術的・社会的な貢献

第一章で文芸理論を整理したのちに展開される第二章の種々の議論においてはバス氏独自の見解が示されており、十分な独創性や重要性があり、社会的要請にも応える可能性を持つものであると認められる。

本論文の瑕瑾としては、上記のように日本語能力、「書く」という能力において未熟な点が見受けられることである。また、「結論先にありき」という論法に走りがちところが一部に認められる。しかしながら、非漢字圏出身者として、文章技巧の複雑な近世浄瑠璃の研究によく取り組み、比較的先行研究の少ない近松浄瑠璃の文章技巧の研究分野について一定の成果を出した点は、十分に評価できると考えられる。

今後、本国にてこの分野に関する発信を続けていきたいとのことであるが、作品内容、テーマに研究の手を伸ばして精進していただきたい。

4. 結論

以上の審査内容、評価にもとづき、本学位論文審査委員会は、全員一致で、バス・アンビカ氏の博士学位請求論文『近松演劇研究』が博士（日本文学）の学位を授与するに値するものであると判断し、ここに報告する次第である。

以上